

カトリック王と宗教的マイノリティ集団

— 写本挿絵にみるカスティーリャ王国アルフォンソ 10 世とその宮廷 —

久米 順子（東京外国語大学 准教授）

第二十五回研究会（2018.05.12）

本報告では、13 世紀のカスティーリャ王アルフォンソ 10 世（在位 1252-1284 年）が制作させた写本挿絵を題材とし、そこに描かれた宗教的マイノリティ集団——ムスリムとユダヤ教徒——がアルフォンソ 10 世の宮廷においてどのように捉えられていたのかを考察しようと試みた。彼が作らせた多数の写本のなかでも、とりわけ挿絵数の多い《聖母マリア詞華集》（エル・エスコリアル王立修道院図書館 MS T.I.1）および《チェス、さいころ、盤上ゲームの書》（同図書館 MS T.I.6）を中心的に取り上げた。

前提となるのは、アルフォンソ 10 世自身の写本制作への深い関心と関与である。《聖母マリア詞華集》には、彼が一人称で語る、自分や家族に聖母マリアがもたらした奇蹟譚が複数含まれている。また、彼が編纂・制作させた写本には、少なくとも一回以上、学者や楽師に取り巻かれながら写生に口述筆記をさせるか巻物・写本を授受する王が描かれている。玉座、王冠、マントいずれかにレオン・カスティーリャ王国のシンボルマークが付けられるが、王妃を伴うことはなく、王杖、王笏といったヨーロッパで普遍的な王権のシンボルも十字架のようなキリスト教的モチーフも用いられていない点に特色がある。すなわち、宗教的権威に拠らず、「賢王」というあだ名のとおり、学問学芸を庇護し実践する姿が強調されている。

アルフォンソ 10 世は、宗教を問わず有用な人材を登用したことで知られている。実際に写本挿絵に描かれた彼の宮廷にも、容貌・装束から非キリスト教徒と判断できる学者や楽師が多数確認できる。

しかし、以下のことが先行研究により指摘されている。《チェス、さいころ、盤上ゲームの書》に描かれたプレイヤーは、一見、ジェンダー、宗教、職業等の点で多様に見えるが、実際には同一のグループに属する者同士の対決の方が多い。異なるカテゴリーの者が相対するゲームでは、女性よりも男性、非キリスト教徒よりもキリスト教徒が勝つ傾向が顕著である。また《聖母マリア詞華集》では、ムスリムが残虐な裏切り者として、ユダヤ教徒はムスリムよりも「悪い」不信心者として登場する。一方、キリスト教に改宗したり、キリスト教信仰への理解を示したりするなど、改宗により近い位置にいる「よき」ムスリムやユダヤ教徒も頻繁に描かれる。

いずれの写本においても、ムスリムは男女問わずターバンを巻き、男性は長髯であることが多い。ユダヤ人男性は先の尖った帽子かフード付きの服を身にまとい、鷲鼻が強調された横顔表現が頻出する。ムスリムもユダヤ教徒も先端の反り返った浅履きの黒靴を履いていることが多く、キリスト教徒の装いとは異なっている。ただしキリスト教徒の女性とユダヤ教徒の女性に関して

は、テキストが伴わない限り、外見のみによる区別は困難である。全体的にキリスト教徒は肌が白く髪の色が明るい、ユダヤ教徒は黒髪黒髭という傾向は認められるものの、例外は数多い。特にムスリムは、肌の色、髪の色、服装に大きな幅がある。

アルフォンソ 10 世の宮廷には、外交使節等の一時滞在者を含めて、ヨーロッパ各地域、ナスル朝グラナダ王国などイベリア半島のイスラーム勢力、マグレブのイスラーム諸王国から多種多様な外見と装束の人間が姿を見せていた。そうした現実社会の観察に基づく描写であろう、写本挿絵に描かれたマイノリティ集団の姿は一樣ではない。しかし一方で、宗教的イデオロギーに基づく不信心者、異教徒、宗教的敵としての姿も執拗に描かれており、彼の宮廷が「寛容」に満ちた三宗教共存の文化的楽園であったとは到底言えない。

カトリック王としての自負と限りない領土的野心を併せ持ったアルフォンソ 10 世にとって、ムスリムやユダヤ教徒の一部の知識人層のもつ豊かな知識や教養は、魅力的であり尊敬に値するものであった。しかしカトリック王の支配を脅かす集団としてのマイノリティには彼は厳しい政治的措置をためらわなかった。アルフォンソ 10 世の写本挿絵には、こうした王の態度がかなり直接的に反映されているといえることができる。